

優秀賞

自分の人生に責任を持って生きる

京都府 京都府立洛北高等学校附属中学校 三学年

藤居 空

曾祖母が九十九歳の天寿を全うした。

曾祖母は、現役時代は脳科学を研究する医師として活躍していたそうだが、引退後も、医学や健康に関心を持って、家族の中でも率先して健康維持に努めた。早起き早寝の規則正しい生活、精進料理のような質素な食生活、そして、適度な運動のための散歩を欠かさなかった。また、家族や地域の人の健康相談にものっけていて、頼りにされていた。

そんな健康的な曾祖母は、医療現場で医学の飛躍的な進歩を見てきたこともあり、早くから人生百年時代を予想していたという。そして、「百年も生きたら、どんな元気な人でも病気や介護は避けられないだろうから、自分の人生は最後まで自分で責任を持つために保険に入る。」とあって、生命保険に加入していたという。

お手本のような健康的な生活を送る曾祖母は、七十歳を過ぎるまで病気らしい病気にはかからなかった。しかしながら、そんな元気な曾祖母も七十歳で大腸ガンを患った。定期的に健康診断を受けていたため、ガンは早期に見えられ、手術を受けて完治した。そして、数週間に及ぶ入院だったにも関わらず、ガン保険に加入していたおかげで、年金以外の定期的な収入がない曾祖母が家族に経済的な負担をかけることなく退院したという。

入院費も高額であったが、ガン保険金もまた高額であったことを聞いて驚いた。少ない保険料でこれだけの保険金が捻出できる仕組みに興味を持って調べたところ、保険とは、加入者が保険料を負担し合って、病気、死亡などの保険事故が発生した際に、保険料の一部を使用して給付金として損失に充てる相互扶助の仕組みで成り立っていることがわかった。さらに、大規模災害などの大きなリスクに備え、保険会社がさらに別の保険会社に再保険をかけることもあるという。民間保険といっても公益的な方法が採用されており、生活資金では賄えないような急な多額の支出（損失）があったときに給付が受けられる優れた仕組みだ。

退院後の曾祖母は、入院中に見聞きしたガン治療のほか、ロボットやAIを使用した最新医療のことを学びたいと、八十歳を超えてから医大に聴講生として再入学し、生涯学びを続けた。末期は大好きな散歩もままならない要介護状態となったが、自分がかけていた保険に救われて、家族に大きな負担をかけ

第62回中学生作文コンクール

ることなく手厚い介護を受けて、穏やかに天寿を全うした。

曾祖母がいうように、保険は人生百年時代に自分の力で家族に負担をかけることなく生き抜くために必須の仕組みだ。私も将来最後まで自分の人生に責任を持って生きるために、生涯設計を立てて必要な保険に入ろうと思う。